会員の広場

「漆の実」句会の近況

小山　八州史・報

当句会草創より主宰として会員を指導してくださった鈴木淳一師が八月中旬に急逝された。七月に脳梗塞を発症されたが、手当てが早かったため危機は脱したということだった。見舞いに参上した時もリハビリに専念するというお話で一安心の状況であった。しかし八月十三日、病状改まり、ついに帰らぬ人となられた。数カ月前には、ご舎弟の鈴木脩二様を亡くされ悲しみにくれておられたが、あまりに間のない悲報であった。脩二様の有為会に貢献された功績は皆様のよく知るところであり、実に悲しい事実の連続であった。

修二様の亡くなられた後の主宰の句

弟死に夏蝶頻りにまといつく　淳一

兄弟の幼き日の思い出と現在の悲嘆を詠った絶唱は涙を誘う。

句会「漆の実」を鈴木主宰と共に創設されたが現在休会中の下條泰生氏（俳号・怡生）からは次のような弔句が寄せられた。

蜩やかなかな残し霊柩車

会員の追悼句

ダンディに杖しかとつき大花野　弁之助

秋空の真直な背筋わが師逝く　丹波

鈴木淳一師・遺作五句（平成三十年）

兜太逝き吹雪く秩父の狼哭く

野遊びの西洋画あり珈琲店

ポスターの美女裏返る余寒かな

鬼やらいごそと厨で猫動く

苗売りの巣鴨駅前ひそと立つ

会員の作品（三十年度・五十音順）

胡瓜咲く葉にも蔓にも風の色
土用太郎野菜炒めで済ましけり

池田弁之助

手洗ひの洗濯うれし秋の川
手のひらにバジルの英気感じ摘む

大田　甘美

材木屋の材焦がさんと残暑居り
虫の音の消えし参道寂光院

片山　丹波

抱え来て縁にぶちまけ茄子胡瓜
畏みて猫手を伸ばし秋の水

小山八州史

踏切灯打ち狂う吾の夏来たる
耳たぶの形辿りて夏来たる

佐野　真

暫くは掛けた気のせぬ夏蒲団
帰省子も去りカステラの紙を剥ぐ

登坂かりん

植木市親方遅い一服す
淡々と「死亡一名」脂照り

濱田　扇風

秋水や雨一粒に広がる輪
鰯雲海士口きかず魚捌く

松原　薫子

なお、当句会の今後につきましては、会員の合議の結果小山八州史が継承することとなりました。当面、主宰制はとらず、アドバイザーとして活動してゆく方針です。有為会の皆様のご入会を切にお待ちいたします。